東海地域における通過儀礼の特徴・変遷
―離島の少子高齢・過疎化を中心として―

尤　　銘　煌
（社会学）

1. はじめに

恩師二宮哲雄教授は『東海地域の社会と文化』という著書の中で以下のように述べておられる。「東海は日本のミドル・リージョン（Middle Region）であるかという問いであった。東海は日本列島の中央部に位置している。そして、東北や西南のみならず、関東や関西、さらには北海道や九州（西南に含まれる）沖縄と比較してみても取りたててその地域の個性を列挙されることは無かった。これを逆に言えば、日本のどこにでもある日本を代表する平均的なミドル（Middle Region）の性格を持っているのではないかと考えたのがその理由である」[1]

このように東海地域は東日本文化と西日本文化の中間に位置している。東海地域を調査すれば日本の平均的な性格を見出すことができると考えられる。故に、いち早く少子高齢・過疎化に見舞われた東海地域の離島を研究すれば日本の未来が予測でき、これから直面するさまざまな課題を解決するヒントが見つけられるのではないかと考える。そこで、東海地域の離島をフィールドとして現代社会において最も重要な課題である少子高齢・過疎化と伝統風習（通過儀礼）を考察することとした。

東海四県の中に岐阜県を除く静岡、三重、愛知三県で離島が10島ありそれぞれ特徴がある。それは、静岡県の唯一の離島「アイランドリゾートの島ー初島」、愛知県の「アートの島―佐久島」、「蛸の島―日間賀島」、「おんべ鯛の島―篠島」、そして三重県の「女護の島―渡鹿野島」、「真珠の島―間崎島」、「三島由紀夫の潮騒の島―神島」、「寝屋子の島―答志島（答志町）」、「海女の島―菅島」、「人口密度が世界一高かった島―坂手島」である。それらを現地調査地としてそれぞれの島における少子高齢・過疎化がもたらした通過儀礼の特徴と変遷を探ることによって日本の社会、伝統儀礼の行方を明らかにすることができると考えた。

海に囲まれている自然の島で生きる暮らしの中で生まれた島民の通過儀礼という先人の知恵はどのような変貌の過程をたどってきたか、また通過儀礼と関連している地域、社会、家族、親族、宗教などについても現地調査を踏まえて分析してみたい。また、少子高齢・過疎化に対処するために、島民たちはどんな独自の離島振興策で過疎化の防止と島の活性化をはかってきたか、そして、それらの振興策が島の通過儀礼にどんな影響を及ぼしたかをも究明したい。最後に、諸離島における通過儀礼が希薄になった主因を解明し、日本全体の将来像

[1] 二宮哲雄編著『東海地域の社会と文化』御茶の水書房、2002、p.1.

を考える参考にしたい。日本の縮図である東海地域の諸離島は日本の未来図を先に描いてくれる鏡であると考えている。

2. 調査概要

東海地域の静岡県（初島）、愛知県（佐久島、日間賀島、篠島）と三重県（神島、渡鹿野、間崎島、答志島（答志町）、菅島、坂手島）を実態調査地（現地調査）としてフィールドワークを行った。調査研究の方法として主に文献調査、インターネット情報収集、聞き取り調査とアンケート調査を採用した。調査時期は次の通りである。初島：2007. 4. 13-14、2008. 7. 8、佐久島：2007. 5. 24-26、2008. 3. 27-28、間崎島：2007. 6. 20、2008. 6. 12渡鹿野島：2007. 6. 22-23、2008. 6. 13、神島：2007. 9. 10-12、2008. 7. 5- 6 、篠島：2008. 5. 9-11、日間賀島：2008. 6. 7-９、答志島（答志町）：2009. 5. 27-28、菅島：2009. 5. 28-29、坂手島：2009. 5. 30

東海地域（三重県、愛知県、静岡県）の離島図 [2]

[2]「島の小学校めぐり」http://geo.shimanogakkomeguri.com/
横山島は無人島である。賢島は、近鉄と大橋によって本土と繋がっている。両島は本現地調査の対象に除外される。

3. 諸離島における通過儀礼の特徴及び概要

1）. **初島**：静岡県の唯一有人離島である初島は、熱海市･伊東市から約11キロで相模湾にある。熱海発と伊東発の定期船｢イルドバカンス｣で約23分かかる。1994年に面積18ヘクタールの会員制初島クラブリゾートホテルが建設された。初島はアイランドリゾート島として全面的に観光業に転換した。現在、島の約99%の収入は観光業に頼っている。漁業は僅か１％にすぎない。初島の全土地の２/３以上を初島アイランドリゾートとXIV初島クラブに貸したため、島民は土地賃貸の収入によって生活の経済基盤を築いている。

農漁業から観光業に変わり島民の生活が豊かになったが、少子高齢・過疎化は相変わらず進んでいる。江戸時代から維持されてきた41戸制度の崩壊を垣間見ることができる。観光アイランドに転換した結果島民に心のゆとりが少なくなり通過儀礼の簡略化は他地域よりも速く進んでいる。特に島では通過儀礼ごとに行っていた振る舞いはほとんどなくなった。今まで初島に代表されてきた伝統的な葬送儀礼もほとんど消えていた。島民が亡くなると島民全体が１日休業して葬式に取り組むことが特徴であったが、本土の葬式会館へ移転することによってこの特徴は風化した。かつて農漁業を支えていた地域共同体が崩れてゆくことは、初島における通過儀礼の急速な簡素化をもたらした。また、住職と神主の不在により、通過儀礼の簡略化に拍車がかかった。そして島民の65歳以下の嫁はほとんど本土の人であるため、島の伝統的なしきたりは早くから都会化した。島よりも都会の雰囲気であったからだ。豊かさを手に入れた代わりに島における大切な伝統、風習、素朴さ、人情がだんだん失われていくのではないかと思われる。

2）. **佐久島**：愛知県の渥美半島と知多半島に挟まれている三河湾に浮かぶ愛知三島（日間賀島･篠島･佐久島）の中で佐久島の面積が最も広くて資源も一番多かったが、漁師の減少、漁業環境の悪化、高校、大学への進学、本土への就職、嫁不足など主な原因で少子高齢・過疎化が三島の中でもっとも深刻である。少子高齢・過疎化、病院不足、結婚・葬式会館がない、神主不在などの関係により帯祝、宮参り、七五三、成人式、結婚式、葬儀などは島ではなく、本土で行うようになり通過儀礼はかなり簡略化されてきた。島では、今でも根強く残っている伝統的な通過儀礼は厄払い儀式である。東西二地区とも２月の最初の午の日に本土の神主を呼んで厄払いや餅投げなどで盛大な厄除け儀式が行われる。また、正月８日に厄男が弓で悪鬼を象徴する八角凧を射るという厄払い儀式である「八日講祭」[3]は240年前から続いてきた伝統的な神事で一色町無形民俗文化財にも指定されている。

---

[3] 木と紙で作られた八角凧の正面に鬼という字を書いて厄男2人が弓を引いてその凧を射る。そして、参拝者が凧の骨を奪い合って残骸を持って帰って自宅の神棚に飾って1年間家族の安全と幸福を願う儀式である。

それを打開するために島の有志が「島を美しくつくる会」を組織して一般的な観光アイランドと異なった現代美術により島をおこして文化的な島づくりを目指していることが全国から注目されている。アートによる町おこしは日帰りの観光客を増やすことである程度成功し、島の活性化に貢献したが、少子高齢、過疎化に対する根本的な解決策にはなっていない。通過儀礼の簡略化は依然進んでいる。佐久島は初島のようにアイランドリゾートの島に転換されないので、独特な島の風景がたくさん残されている。それを活かしてアートと調和する対策が求められる。

３）．**間崎島**：三重県志摩市志摩町に属し、伊勢志摩国立公園の南部英虞湾の中央部に浮かぶ間崎島は、主産業である真珠業により島民に莫大な富をもたらした。大正時代から昭和にかけて真珠養殖業の最盛期に真珠養殖からもたらされてきた富により島民のラジオ、テレビ、電話などの普及率は一時的に全国のトップを占めた。しかし、1992年から真珠の感染症、真珠養殖技術の海外移転、海外との競争などによる真珠価格の下落などのため、真珠養殖業は不況が続いて危機に直面している。真珠業の没落により少子高齢・過疎化が急速に進んできた。子どもがほとんどいなくなったため、間崎島の通過儀礼は出産及び幼年期に関するものもほとんどなくなった。高齢化率は約72%なので、結婚式もほとんど見られない。年齢に関する儀式の中で厄払いのみが根強く残っている。従来、漁民の生活が不安定なので厄に関しては関心が高いからだ。葬送儀礼について数年前に鵜方と和具にそれぞれ葬祭会館が建てられたのがきっかけで葬儀業者への依頼によって伝統的な儀式がだんだん消えていっている。特に、間崎島では住職がいないため、葬式組の崩壊や葬儀当日に１周忌までの法要を済ませるなどの伝統儀式がなくなってきている。

少子高齢、過疎化が深刻である間崎島では独自の振興策はほとんどない。今まで調査してきた島々の中で少子高齢、過疎化が最も深刻である。通過儀礼において厄払い儀式以外の伝統的な儀式はほとんど崩壊した。島が独自で振興政策を打ち出す気力はもはやないと思われる。将来、間崎島が生き残れるかどうか行政の担当部門に委ねるしかなさそうである。

４）．**渡鹿野島**：伊勢志摩国立公園の中で的矢湾の西部に浮かぶ小さな離島である渡鹿野島は、真崎島と同じように主産業の衰退により少子高齢・過疎化が進んできた。漁業権や畑もない渡鹿野島はもともと厳しい環境に置かれていたため、古くから風待ち避難港として「ハシリカネ」、「菜売り女」の風俗業が栄えてきた。だが今では観光業に力を入れて「女護島」のイメージを変えようとしている。しかし、古くから知られてきた「ブランド」は簡単には変えられない。筆者が島で調査していた時、「やり手ばば」が今でも頻繁に活動している現場を見た。「置屋」もまだ現存していた。特にフィリピンやタイなどからの外国人出稼ぎ女性が

目立った。しかし、廃業したホテルや空き部屋などがあちこちに見られる。渡鹿野島は今でも時代や法律の隙間に彷徨って生き延びているが、将来渡鹿野島が生き残るためには、風俗業や賭博などの遊芸特区を申請するか、いっそ風俗業を島から排除してクリーンなイメージで観光業を再出発させるかその選択をせまられている。

通過儀礼に関して、生活環境が非常に厳しいので徹底的な節約規定が作られている。幼年期と年齢に関する儀礼について神主が不在のため、宮参りと七五三が島内で行われなくなった。子どもの安全及び健康を祈願するお食い初めと初誕生も環境の変化、医療の進歩により行われなくなった。また、初節句を象徴する派手な雛人形飾りと鯉幟などは消費節約申合規定により禁止され、厄除けの菖蒲風呂のみ行われている。厄年における厄払い儀式のみは今も行われている。長寿祝いは身内だけで行われることになり結婚式についても島内ではなく本土のホテルで行われる。お葬式もだんだん本土の葬儀社に依頼することになった。少子高齢・過疎化及び観光業の衰退により最も簡素化されてきた島の通過儀礼にもさらに陰を落としてきている。

5）．**神島**：三重県の伊勢湾の入口に位置し伊勢神宮へ献上品を運ぶルートとして古くから重視された神島は三島由紀夫の「潮騒」により世間から注目された。神島では、伝統的な通過儀礼は他の島々よりも多く保存されている。特に島では高齢者を敬う意識は古くから存在していた。「どんな通過儀礼が残っているか」及び「どんな通過儀礼を一番残してほしいか」というアンケート調査結果が示しているように「長寿祝い」はいずれも第１位に選ばれた。神島における高齢者を敬う気持は隠居衆、宮持制度、多数の長寿祝いなどからも伺われる。幼年期と年齢に関する儀礼について最も興味深いのは初節句における三月三日の桃の節句及び五月五日の端午の節句に雛人形、武者人形を飾らないことである。神島では海に囲まれている厳しい環境の中で派手な人形飾りなどよりも初節句の古来の役目である厄払い儀式が選ばれたのではないかと思われる。七五三について神島では、男女の区別なく三歳のみのお祝いが行われる。神島の七五三は古い風習が未だに残っていることを示している。

通過儀礼の中で出産儀礼以外に著しく変化したのは結婚式である。「行われなくなった通過儀礼」というアンケートの調査結果も示すように結婚式が第１位に選ばれた。また、宗教の信仰心は薄くなってきているが厄年に関する伝統習慣は相変わらず根強く残っている。葬送儀礼について全て葬儀業者に頼らない独自な風習を残している。一方、少子高齢・過疎化は他島々と同じようにかなり深刻に進んでいる。将来、島に生き残るためには島の有志が佐久島と同じような「島を美しくつくる会」などを結成して島の振興策を急いで策定しなければならないであろう。今回の東海地域の調査に当たって神島の島民たちが一番親切に協力してくれた。まだ観光化されていない神島には島における独特な温かい人情や風習をずっと残

することが期待される。

６）．**篠島**：伊勢神宮領地であった愛知県の篠島は中世から「御幣鯛（おんべいだい）」として年３回（６月12日の月次祭、10月12日の神嘗祭、12月12日の月次祭）合計508尾の干鯛を伊勢神宮に奉納される伝統行事が行われてきたため、「御幣鯛の島」とも呼ばれている。篠島は古くから観光地として親しまれてきた。八百メートルの砂浜（前浜とも言う）を持つ海水浴場が白く美しくて観光地として三河湾三島（日間賀島・篠島・佐久島）の中で島民や観光客の数が一番多かったが少子高齢・過疎化などの原因で近年来日間賀島に追い越された。危機を感じた島民は観光協会を立ち上げたり年配の島民による無料観光ガイドを実施したりして懸命に努力している。また、篠島を一周する道路（弘法道）に八十八体の弘法大師の石像が小祀に納められて道の周辺に安置されている。弘法大師の命日である旧暦３月21日に弘法大師の日を作って島弘法として島の観光・活性化及び歴史・文化をアピールしている。

通過儀礼において最も有名で伝統的な儀礼は通い婚、寝宿（成人式）、お正月の大名行列（厄年）と葬式における念仏婆さんであったが、現存しているのはお正月の大名行列（厄年）のみである。これ以上少子高齢・過疎化が進んでゆくと将来的に篠島独特のこの行事の開催も困難になるのではなかろうか。葬式について葬式の祭壇や道具などは葬儀業者に依頼する。島には葬祭会館がないので葬式の場所は寺か自宅で行う。親戚同士と隣組が葬式を手伝う。篠島では伝統的な葬式がまだ見られる。その他、通過儀礼における七五三、宮参り、厄払いなどは神主の不在により簡略化されている。また、七五三は男女関係なく数え３歳の子のみを行うのが特徴である。

７）．**日間賀島**：愛知県の渥美半島と知多半島に挟まれている三河湾に浮かぶ三つの島（日間賀島・篠島・佐久島）の中で面積が最も小さいが人口が一番多くて観光客の数も最も多い。「タコ（多幸）の島」、「フグ（福）の島」と呼ばれている日間賀島は良質なタコとトラフグがたくさん漁獲されることでよく知られている。少子高齢・過疎化率も調査してきた東海地域全離島の中で一番低くて安定している。これは、地域に根ざして故郷の発展に尽くしてきた島民たちの賜の努力だと思う。通過儀礼について昔から食い初めという風習がない。七五三は「かみおき」と言って数えて３歳の男女のみ行った。現在では満５歳の男女も行う。儀式として神社へ参り神主に祈祷してもらう。また、親戚を招いて赤飯を配ったり振る舞いを行ったりしている。

近隣の篠島とよく似ているものの神主や念仏婆さんなどが存在しているので篠島より伝統儀式を多く残している。少子高齢・過疎化が最も安定している日間賀島の通過儀礼も他島よりもたくさん保存されているが、観光業の発達により本土との交流が活発になるにつれ伝統

風習もだんだん都会化してゆく。その中で結婚式の変化が最も激しい。一方、厄年と葬式の変化が最小限に留まっている。日常生活は常に危険が伴う漁民生活では、厄払いが今でも重視されている。また、葬式の時に葬式業者にあまり頼らず、島民たちが互いに助け合うことによって島の人間関係が深く繋がっている。「島中親戚」という言葉が今でも使われているのはその証明である。

8）．**答志島**：鳥羽から定期船で約20分の答志島は、答志町、和具、桃取町の三地区がある。鳥羽湾に浮かぶ最大の島で人口も最も多いが、1970年の人口に比べると約半数になっている。少子高齢・過疎化の進行は止まらない。かつて日間賀島、篠島、神島などこの地方の各地で見られた成人式の一種である「寝屋子（若者宿）」制度が行われたが現在では答志島の答志町しか残されていない。寝屋子制度は鳥羽市の有形文化財にも指定されている。平成20年４月までに寝屋子は11軒でメンバーは66名である。かつてメンバーは主に若者であったが、今では社会人、漁業従事者、大学生なども含まれて平均年齢が高くなった。また、メンバーの一部は、本土に住んでいる。寝屋子制度という伝統風習を保存するために制度自体が時代とともに変化してきた。

通過儀礼についてまず、男の初節句である端午の節句では、他地方の新暦と異なって旧暦４月27日から一週間くらいの間に初幟と菖蒲湯の入浴を行うのが特徴である。また、厄払い儀式として、四つ角のところにお金を落として拾ってもらう風習が現存している。そして結婚式の時に仲人は、婿の叔父夫婦と寝屋親夫婦の２組が赤魚とがしらという魚を３尺の酒が入っている酒樽に吊るして嫁の家へ持って行くという風習が残っている。共同意識を象徴する三三九度と同じような「食い合い」[4] も行われる。結婚式は島で行うが、披露宴は鳥羽市で行われる。披露宴の時に参加者たちが日の丸の描かれている扇子を出して、万歳を唱えるのも特徴である。長寿祝いに関して還暦祝い以外はほとんど行わなくなった。お葬式は２~３年前から全部土葬から火葬に変わった。葬儀は葬儀業に依頼して本土の葬式会館で行うこともある。

9）．**菅島**：鳥羽から定期船で約13分の菅島は、「御厨」として古くから伊勢神宮へあわびなどを奉納してきた。鳥羽市の無形民俗文化財に指定された「しろんご祭り」の主役である海女が競い合って最初に捕った鮑は島の守り神とされて白髭神社に奉納される。「海女の島」として有名だったが、少子高齢・過疎化の影響で海女の数は約50名しかいなくなった。海女の年齢もほとんど50，60代以上である。島では、小学校しかないので、子どもが中学生にな

[4] 新郎新婦それぞれの食べ物を取り替えて互いに食べる。共同意識を持たせる儀式である。

ると皆本土へ移っていくとともに親も本土へ出る人が多い。少子高齢・過疎化の現象が続いている。

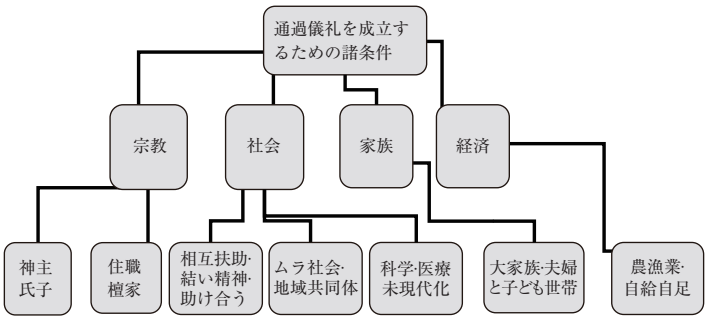
平成７年に菅島町生活改善委員会の新生活規定の公布により島の通過儀礼は極力簡素にという目標を掲げた。その結果、出産祝、初節句などの振る舞い、厄年祝の金銭撒き、葬儀の生花などが廃止された。通過儀礼の特徴として子どもが生まれると鯉幟をあげて子どもが四、五歳まであげる。また、七五三は元々島の風習ではなかったが、20年前から外島からの嫁及びテレビやインターネットなどのメディアの情報から行われるようになった。七五三では、島の神社ではなく伊勢神宮へ参りに行く。また、厄払いでは、松阪の岡寺へ参りに行ってから菓子、餅、お金を撒く。結婚式はほとんど島で行わない。長寿祝いは八十八歳という「升掛け」祝いのみ行われる。葬式について亡くなった人が七十歳以上であれば、葬儀にお金を撒く風習が未だに残っている。葬式は徐々に本土の葬式会館へ移っていくも島で葬式を行う場合は隣近所という葬式組で助け合う。香典返しは行わない。また、服喪の習慣は今まだに残っている。そして埋め墓と詣り墓という両墓制を行っている。

10）．坂手島：鳥羽市から約８分で定期船便数（１日17便）が一番多くて便利な坂手島は鳥羽市の対岸に浮かび、面積は0.51㎢で周囲3.8㎞の小さな離島である。1956年に約2,500人が住んでいた。かつて「人口密度が世界一高かった島」とも呼ばれたが、少子高齢・過疎化により、2009年４月30日現在では、523名の人口で小学生は９名、小学生以下の子どもは６名しかいない現状である。三重県の４離島の中で高齢化率が最も高い。島に唯一の小学校も廃校に追い込まれた。子どもが少なくなったため、お七夜、お宮参り、食い初め、七五三、初節句など子どもの幼年期に関する通過儀礼が極めて薄くなっている。結婚式、厄払い儀式、葬式以外の通過儀礼は身内のみでのお祝いがほとんどである。厄払いのみに旧暦の２月に本土に住んでいる島の出身者を呼んで行ない、国内旅行へ行く。お餅、お菓子などを撒いたり初午厄年祝いの歌を歌ったりなどの風習はなくなった。このように地域共同体での共同祝い儀式から個人単位へ移り変わった。また、結婚式と葬式はほとんど本土で行っている。島に住む多くの島民が本土に通勤しているため、島内の通過儀礼においても本土とはほとんど変わらなくなった。

4. 諸離島における通過儀礼が稀薄になった主因

現地調査により、離島における通過儀礼が成立するための諸条件は以下の図が示すように宗教、社会、家族、経済などと深く関連している。一方、少子高齢・過疎化、単独世帯の増加、住職・神主の不在などさまざまな原因によって通過儀礼の成立に当たる諸条件がだんだん崩壊してゆく。

表１　通過儀礼が成立するための諸条件図



１）．少子高齢・過疎化：

「総務省は2009年４月４日に「こどもの日」を前に15歳未満の推計人口（2009年４月１日現在）を発表した。子どもの数は昨年より11万人少ない1,714万人で、82年から 28年連続減少し、過去最低を更新した。総人口に占める子どもの割合は13.4％で、前年比0.1ポイント低下し、こちらも過去最低となった。また、総人口に占める65歳以上の高齢者の割合は0.7ポイント上昇して22.5％となっており、少子高齢化の進行が浮き彫りになった。」[5] 一方、東海地域の各離島の高齢化率は以下の図で示したようにいずれも全国平均の22.5%よりも高い。また、調査した時点と過去最高の人口数と較べると人口減少率の平均は52.89%にも達している。少子化が急速に進むのに伴って、渡鹿野島（2006年）、間崎島（2006年）、坂手島（2009年）の小学校が廃校となった。離島の少子高齢・過疎化が急速に進んだ結果、伝統的な通過儀礼も稀薄になったことが伺える。特に、出産儀礼及び幼年期に関する儀礼は超少子化、無子化に伴ってだんだんなくなっていく。一方、超高齢化とともに還暦や古希などかつて長寿と見なした祝いも行われなくなった。

[5] 総務省「子どもの数（15歳未満人口）は1714万人、28年連続の減少」
http://www.stat.go.jp/index.htmである。

表２　　各島の面積・人口・高齢化率

島名	面積（km³）	人口（人）	高齢化率（%）	調査時間	過去最高の人口数（人）	人口減少率（%）
初　　島[6]	0.44	227	23.35%	2009.1.31	297（1948年）	23.57%
間崎島	0.36	163	72.00%	2008.4.30	668（1955年）	75.60%
佐久島	1.81	315	48.30%	2005年国勢調査	1,634（1947年）	80.73%
渡鹿野島	0.69	309	37.50%	2008.4.30	502（1995年）	38.45%
神　　島	0.76	465	41.30%	2009.4.30	1,405（1953年）	66.91%
篠　　島	0.93	1,878	25.80%	2005年国勢調査	3,785（1950年）	50.39%
日間賀島	0,77	2,164	26.10%	2005年国勢調査	2,788（1955年）	22.39%
答志島	6.98	1,889	30.20%	2009.4.30	4,135（1970年）	54.32%
菅　　島	4.52	761	32.70%	2009.4.30	1.218（1960年）	37.53%
坂手島	0.51	523	51.40%	2009.4.30	2,500（1956年）	79.08%
平　　均	1.77	869	38.86%		1,893	52.89%

２）．単独世帯の増加：

国立社会保障・人口問題研究所が公表した「日本の世帯数の将来推計」によると世帯の形態は、2006年に「単独世帯」が1471万世帯で初めてトップとなり、それまで最も多かった「夫婦と子どもからなる世帯」は1455万世帯だった。この差は今後さらに拡大し、30年には単独世帯が1824万世帯、夫婦と子ども世帯は1070万世帯になる見通しだ。75歳以上の高齢者の単独世帯は30年に429万世帯（05年は197万世帯）となる。世帯の「単独化」と「高齢化」について、同研究所では、「少子高齢化や団塊の世代の高齢化などの影響が大きい」と分析している。[7] 単独世帯の増加により通過儀礼の次世代への伝承ができなくなる。また、墓の面倒を見る人が少なくなり伝統的な葬送儀礼は見直さなければならなくなる。諸離島における単独世帯の深刻さが地元の声としてよく聞かれた。

３）．結婚・葬祭業者の出現：

自宅葬の比率が年々減少しているのに対し葬儀専門の式場での葬儀の比率は年々急速に増加している。一方、結婚式は葬式よりも早くから結婚式場で行うことになった。過去、一般の結婚式と葬儀は親戚と近所の相互扶助によって行われた。しかし、現代社会において人々の多忙な生活により人間関係がだんだん稀薄になってきた。大部分の結婚式と葬儀が業者に委託される形となるとともに伝統的な風習が行われなくなった。諸離島の調査結果も示したように各離島の結婚式はほとんど本土の結婚式場で行われている。お葬式については、半分以上の離島は葬儀業者に依頼することになった。1995年～2007年に発表された日本全葬連に

[6] 1994年に初島の人口が157人まで落ち込んでいたため、大型のリゾートホテルの建設を受け入れた。その後、リゾートホテルの職員（約80名）が初島の人口に付け加えた。

[7]「世帯数で「単独」が初めて最多に…1471万世帯」、読売新聞、朝刊、2008.3.14.

委託された財団法人日本消費者協会が実施した「第５～８回葬儀アンケート調査」の主な調査結果（葬儀場所、葬儀委託処の詳細内容）からも伺われる。今後、結婚・葬祭業者の依頼はさらに増えてゆくと思われる。結婚式と葬式の全国均一化傾向が強まるとともに島の伝統的な儀式が消えてゆく。

表３　　葬儀場所（％）

場所	1995年	1999年	2003年	2007年
自宅	45.2	38.9	19.4	12.7
葬儀専門の式場(葬祭センター･式場)	17.4	30.2	56.1	64.4
寺･教会	24.4	23.5	16.4	15.6
町内会･自治会などの集会所	7.2	6.9	5.7	4.4
その他･不明	5.8	0.5	2.4	2.9

４）．農、漁業から観光業への転換：

主漁業、副農業という島民の元生活形態は漁範囲制限、魚価額の低迷、海水汚染により漁獲量の減少、石油価額の高騰、後継者の不足などの原因により諸離島は主漁業、副農業を脱却して主観光業、副漁・農業へ転換することがほとんどである。漁業や農業と異なって観光業では季節や天候に合わせることではなく観光客に時間を合わせなくてはならない。生活のリズムは速くて不規則になった。漁農社会に通過儀礼における助け合い、相互扶助のゆとりがなくなった。観光業の背景にある市場競争原理により人々の繋がりが薄くなってきた。このように伝統的な通過儀礼は社会・環境構造、生活・医療の進歩の変化と共に多くが廃れつつある。初島における伝統的な葬儀の廃止はその証である。

５）．地域共同体の崩壊により人間関係の希薄化及び村長（庄屋）の力の弱小化：

隣組や講などの地域共同体がだんだん崩壊していくともに全島民が一緒に支えていた通過儀礼もそれぞれ自分の家で行うようになってきた。昔のように出産祝い、七五三、初節句、長寿祝いなどを行うたびに村の人々を振舞うことがほとんど無くなった。かつては通過儀礼を通して村という共同体の承認を得ることが最も大切なことであった。特に出産儀礼と結婚式は人口の増加で、お宮参りは氏子入りの儀式で、成人式は島から一人前として認める機会で島の繁栄と密接に繋がっていったため島全員の協力が必要であった。しかし、現代社会における個人主義の発達によって島の地域共同体が崩壊に瀕した。その結果として人間関係が極めて希薄になっているし村長（庄屋）の力が弱くなった。

６）．神主・住職・念仏婆さん（講）の不在：

少子高齢、過疎化により檀家と氏子の数が減り続けるに伴い寺、神社への賽銭、布施、祈願料が少なくなる。それゆえに住職や神主の後継者がいなくなって不在になり、寺、社の運営ができなくなって廃寺・廃社の傾向が多く見られる。そのため、安産、宮参り、七五三、結婚式、厄年、お葬式など住職と神主が深く関わっている通過儀礼が稀薄になっていった。また、離島における年寄りの心の寄りところとされる住職、神主以外に念仏婆さん（講）も一つである。念仏婆さんはお葬式に重要な役割を果たしているのみではなく念仏婆さんの組織により島民の付き合い関係が深くなり島の人々の結束力が強くなることもある。しかし、念仏婆さん（講）の解体により高齢者の孤独に拍車をかけている。表４が示したように諸離島の住職、神主、念仏婆さんが半分不在の状況である。過疎寺院に関して「無住職寺院や崩壊寺院が多い地域や地区では老人の自殺が多い」と乗本吉郎が島根県石見地域での調査結果によって指摘した。[8] 宗教と精神生活の繋がりを明らかにした。

表４　　諸離島の住職と神主の現状

離島名	初島	佐久島	間崎島	渡鹿野島	神島	篠島	日間賀島	答志島（答志）	菅島	坂手島
住　職	不在	あり	不在	不在	不在	あり	あり	不在	あり	あり
神　主	不在	不在	不在	不在	あり	不在	あり	あり	あり	あり
念仏婆さん（講）	あり	不在	不在	不在	あり	不在	あり	あり	不在	あり

７）．その他：

医療の進化により自宅出産・臨終から病院出産・臨終という場所の変化によって伝統的な出産と葬儀に関する儀式が時代の流れとともに変わらざるをえなくなった。諸離島には、ほとんど病院がなく診療所しかないので、出産や重大な病気の時には本土の病院に通院するしかない。また、近代化により儀式的な呪術効果が薄れたため通過儀礼に関するタブー、禁忌が少なくなり儀式全般が意義を失ってきた。そして社会及び住民意識の変化により価値観が変った。結婚しない人、結婚式を挙げない人、離婚する人などが増えたのはその証である。グローバル化社会の影響により結婚式場を教会で行う人も多くなった。さらに情報化、IT社会になった現代では諸離島におけるインターネットの整備により情報が一般化した。離島にいながらインターネットを通じて通過儀礼の情報が簡単に得られる。ネットで得た一般的な風習が島に入り込んだ傾向が見られる。例えば、菅島の木下利三氏や坂手島の宮本和則氏な

[8] 乗本吉郎『過疎問題の実態と論理』（財）富民協会1996. pp. 219-224.

どによれば、両島は昔、七五三がなかったという。しかし、現在は行われている。これは、島外からきた嫁やインターネットの情報によってもたらした風習であるということである。

その他、経済の発展により本土に限らず諸離島も豊かになり、諸物資の流通が円滑になり、食べ物の不自由もなくなった。そのため、食べ物に困らないことを主な目的とした食い初めや初誕生（餅を背負う）などの儀式がだんだん失われている。また、初節句における粽、柏、餅などは容易にスーパーで買えるので自ら作らなくなった。そして住宅事情がよくなったため、成人式に当たる寝所、寝屋の制度もほとんどなくなった。[9] さらに車の出現により野辺送りがほとんどなくなった。宗教的な信仰心が希薄になったため、寺・社にかかわる通過儀礼が薄くなったなどさまざまな要因が見られる。

5. アンケート調査概要

2007年４月に静岡県初島の現地調査を初めてから2009年５月の三重県坂手島調査までに東海地域の諸離島の住民に「島民の通過儀礼及び少子高齢・過疎化問題」についてのアンケートの実施を依頼した。最終的に合計184名の島民から回答があった。その内訳は初島３名、佐久島13名、日間賀島19名、篠島15名、神島47名、渡鹿野６名、間崎島９名、答志島（答志町）23名、菅島20名、坂手島29名であった。回答者の年齢は、10代２名、20代３名、30代19名、40代36名、50代40名、60代43名、70代31名、80代５名、無記入５名である。性別は男性95名、女性82名、無記入７名である。職業は旅館業、民宿業11名、漁業47名、パート８名、無職70名、会社員29名、無記入１名、自営業６名、公務員１名、学生３名である。回答者は40代～70代の島民が中心であると思われる。以下、「島内にどんな通過儀礼が残っているか」、「行われなくなった通過儀礼は？」、「どんな通過儀礼を一番残してほしいか」、「島に住んで一番困っている問題」、「島が直面している一番の問題」などの各項目の結果を概観し、今後の課題について考察する。

[9] 寝屋ができたのは、家が狭すぎるのが主な原因であった。特に漁村に寝屋制度が見られた。逆に農村地域では寝屋制度がほとんどみられない。しかし、少子化、家の状況がよくなったなどの原因で神島、篠島などかつて志摩地域でよく行われていた寝屋制度が消えた。

１）．通過儀礼の変貌について（複数選択）

表５　　アンケートの調査結果

項目	どんな通過儀礼が残っているか	行われなくなった通過儀礼は？	どんな通過儀礼を一番残してほしいか
帯祝い	80	37	13
出産祝い	149	13	55
お七夜､命名式	99	36	29
お宮参り	128	23	48
お食い初め	63	38	10
初節句	137	17	44
初誕生日	49	27	18
七五三	79	29	55
成人式	137	18	62
厄払い	148	16	59
長寿の祝い	94	29	48
結婚儀礼	141	30	83
葬送儀礼	158	12	92

以上のように島に残っている通過儀礼の順位は葬送儀礼（158人）、出産祝い（149人）、厄払い（148人）などである。その次は、結婚儀礼の141人で、初節句と成人式の137人と続く。島で行われなくなった通過儀礼と島民が考えるのはお食い初め（38人）、帯祝い（37人）、お七夜、命名式（36人）などである。そして一番残してしてほしい通過儀礼は、葬送儀礼（92人）、結婚儀礼（83人）、成人式（62人）、厄払い（59人）、七五三（55人）、出産祝い（55人）の順となっている。

「どんな通過儀礼が残っているか」について葬送儀礼は通過儀礼の中で最も重要な伝統儀式であることは今でも広く認識されている。第２位の出産祝いについて新しい命の誕生は単に家族メンバーの増員ではなく、島の活力・繁栄と密接に繋がっているため、今でも島にとって大事な儀式である。一方、第３位の厄払いについて生活の危険性が高い漁村では、厄年に関する関心は相変わらず根強く残っている。島で行われなくなった通過儀礼について現地調査により古くから諸島では、食い初めを行う習慣はもともとあまりなかった。また、出産の場所は島の自宅から本土の病院への変化により、帯祝いとお七夜、命名式は島で行われなくなったと見られる。帯祝い及び食い初めの代わりに島における子どもに関する儀礼（出産祝い、七五三）の儀式及び成人式が大切にされてきたことがアンケートの結果に表れたと言えよう。そして、葬送儀礼、結婚儀礼、成人式及び厄払いは島民にとって最も大事な通過儀礼であるとの認識が見られる。

2）．島に住んで一番困っている問題及び島が直面している一番の問題

「あなた自身が島に住んで一番困っている問題は何ですか」という質問に対して「夜間の交通が不便」、「交通が不便」「交通の利便性が悪い」、「定期船の本数が少ない」、「定期船が欠航する事」など59名が挙げる交通に関する問題が第１位である。「病院（歯医者、耳鼻科など）がない」、「救急の時の対策」、「夜医者がいない」、「急病人が出た時」「医療不安」など47名は医療に関する問題が第２位に挙げられる。「買い物が不便」、「物価が高い」、「映画が見られない」、「船代が高い」、「水道」、「ネオンが少ない」「コンビニがない」、「食品店の品数が少ない」「スーパー、お店、小売業（魚屋）がない」、「物価が高い」、「物が自由に買えない」、「買い物の種類が少ない」、など28名が日常生活に関する問題が第３位である。「後継者がいない」、「若い人が少ない」など15名は少子高齢･過疎化に関する問題が第４位である。その他、「嫁不足」、「仕事がない」はそれぞれ３名で「車が走らない」は２名で「安全、安心な港を作ってほしい」が１名である。

一方、「島が直面している一番の問題は何ですか」という質問に対して「人口の減少」、「子どもの島離れ」、「子どもが少ない」、「若者が少ない」、「後継者不足」など「少子高齢・過疎化」に関する問題が最も多く103名いた。15名が挙げた「仕事がない」、「女性の働く場所が少ない」、「島内での就職」、「働ける場所がない」などは仕事に関する問題であった。「医者がいない」、「夜間の診療所は留守」など、10名は医療に関する問題であった。

その他、「漁業不振、魚の安価」８名、「保育所も小学校もない、学校の存続」７名、「嫁不足」５名、「交通不便」４名、「海のよごれ（合成洗剤）によって」３名、「ゴミ処理」、「物価が高い」、「食品、日用品などの物価が高い」、「船代が高い」、「大卒が少ない」、「海面上昇、温暖化」は各１名、などの答えがあった。両質問に「少子高齢・過疎化」を答えた人を合わせると118名にも達した。島における少子高齢・過疎化の深刻さが伺われる。

3）．本土に引っ越すことと祖先代々のお墓を本土へ移すこと

「将来、本土へ引っ越すことを考えていますか」を求める質問には、「子どもが本土で生活している」、「子どもの就学」、「交通不便」、「病院がない」という将来、本土へ引っ越すことを考えている人が36名いた。有効回答129の約１／３を占めている。島における少子高齢・過疎化対策がそのまま放置されれば、島の人口がさらに減少してゆくとアンケート調査結果から判断される。一方、「祖先代々のお墓を本土へ移すこと」の質問に対する有効回答157の中で11名のみは子どもが本土に住んでいるので、考えていると答えた。島民は将来、本土へ引っ越すことを考えている人が多いが、完全に島から離れることを考えている人はほとんどいないとアンケート調査から伺える。

４）．少子高齢・過疎化対策及び政府がどのような対策を講じているか

島民が考えている少子高齢･過疎化対策で最も多いのは、「漁業以外の仕事を増やす」、「若い者の働き場所を作る」、「働き場所を増やす」、「雇用促進」など仕事に関する対策（48名）である。その他、花嫁対策（７名）、定期船の増便（５名）、企業誘致（４名）、漁業振興（４名）、老人医療施設・有料老人ホーム（４名）、島の活性化（３名）、医療整備（２名）であり、産業促進、儀礼簡素化、学校を残す、船員の割引をもっと多くする、離島の過疎化専門組織、コンビニ、教育面を充実させる、本土から人たちの受入体制の整備などがそれぞれ各１名である。仕事場の確保が最も大事であるとアンケート調査結果から考えられる。

その一方、政府がどのような対策を講じているかとの質問に対して、「何もしていない」、「わからない」、「十分な対策が講じられていない」、「感じられない」という否定的な答えが96名もあった。離島振興法（４名）、観光事業に対する補助金、港湾の整備がそれぞれ１名だったが、残りはが無記入であった。ほとんどの島民は政府が離島における少子高齢・過疎化対策をほとんど講じていないと考えている。政府は離島振興をもっと力に入れるべきだと思われる。その他、30名の島民は「橋をかけること」を政府に期待している。

５）．通過儀礼を島に残す一番の方法

「通過儀礼を島に残す一番の方法は何か」意見を求める質問には、「島に人が残ること、島民を増やすこと、若者が島に残ること（27名）」、「儀礼の簡素化（14名）」、「島民の助け合い、信頼（６名）」、「人のお付き合いを大事にすることと近所、親戚の付き合い（６名）」、「若い世代に儀式の持つ意義、背景、歴史を伝えること（５名）」、「町民全体で考える（３名）」との回答があった。その他、「郷土愛を育む」、「お年寄りを大事にすること」、「年寄りの人に聞いてなるべく昔の行事を残す事」、「島民の気持ちを大切に」、「島民の理解が必要」、「島の仲間意識」、「寝屋子を残すこと」、「結婚式を島内で」、「冠婚葬祭場を建てること」、「本土の嫁を探す」、「島に通いやすい方法」などが各１名であった。その他は無回答であった。

以上の答えをまとめてみると通過儀礼を島に残す方法として、やはり少子高齢・過疎化対策が最も重要である。その次は、儀礼の簡素化と島民同士の付き合い、助け合い及び信頼関係を大事にすることが調査結果から見られる。

6. おわりに

通過儀礼を島に残す一番の方法として多くの島民から「島に人が残ること、島民を増やすこと、若者が島に残ること」といずれも少子高齢・過疎化に関する答えであった。即ち、人が島にだんだん暮らせなくなったら、人と密接に関わっている通過儀礼も自然に消えてゆく。「通過儀礼が島に生き残る」とは、まず、人が島で暮らすことである。その次に多くの答

えは、限外集落による地域共同体の崩壊が進んでいる最中、島民互いに助け合うことが更に重要になったことである。「子宝の島」と言われる鹿児島市徳之島はその一例である。「鹿児島市から南へ約400キローの徳之島は世界一の長寿を生んだだけではなく、「子宝の島」として全国から注目を集めている。徳之島にある三の町（天城町、伊仙町、徳之島町）の平均出生率は全国の上位である。村の人が採れたての野菜や魚、出産祝いなどを手にやってくる。村では、子どもの誕生や初節句などの節目ごとに全員で祝福し還暦や古希なども一緒に祝う。かつてどこにでもあった支え合いの暮らしが残る」。[10]

一方、1953年により離島振興法が策定されてから50年以上も経った。諸離島の環境・設備などのインフラが整備されて島民の生活向上に大いに務めたが、離島における急速な少子高齢・過疎化を止めることができなかった。アンケート調査結果にも示したように島民のほとんどが政府の離島政策について失望感を抱いている。離島振興法の大幅見直しが求められる。また、大部分の離島も少子高齢・過疎化に対する独自の振興策が見られない。島民が自ら大胆な振興策を策定しなければ、間崎島（高齢化率72%）と同じようにだんだん無神主・無住職から無子化を経て無人島になってゆくことに違いない。現状のままでは、再生の道は極めて困難である。島民の強い共同意識が問われる。最近、全国から注目されている島根県隠岐諸島の中ノ島（海士町）の山内道雄町長の、大胆な行政改革と産業創出政策が島を再生の道に導いた成功例は、東海地域の諸離島にも大いに参考になるであろう。

通過儀礼は民族生存の根底である死生観をよく反映している。研究調査により人間の生き方を見直す機会が得られる。今後、日本国内の離島のみではなく海外の離島、特に日本との歴史、文化の背景が近い中国、韓国、台湾の離島をも現地調査を行いたい。少子高齢化は「先進国」の固有問題と考えられがちであるが、実際アジアの韓国と台湾は既に日本を上回る速さで少子高齢化が進んでいる。それらの国の離島における少子高齢・過疎化の問題も日本と同じように急速に進展している。このように島の社会現象を背中に感じながら、アジア（中国、韓国、台湾）の離島という本土から海で隔絶された小島では島民の通過儀礼はどのような変遷の過程をたどってきたか、特に、現代社会における日本、韓国、台湾の通過儀礼の原点である中国の通過儀礼の変化、そしてアジアの諸離島における少子高齢・過疎化の振興対策を客観的な調査、国際比較分析により新たな視点及び提案を次回の研究課題にしたい。

謝　辞

今回の調査に協力して頂いた諸離島の方々に心より感謝申し上げます。

[10]「豊かさ再発見―支え合い残る「子宝の島」」読売新聞、朝刊、2006. 9. 12.

参考文献

尤銘煌『平成18年度財団法人東海冠婚葬祭産業振興センター助成調査研究完了報告書』、2009. 2.

尤銘煌「三重県鳥羽市神島における通過儀礼の変遷―離島の過疎化・少子高齢化について」『山形大学紀要（人文科学）』第16巻第４号、2009. 2. pp. 29-47.

尤銘煌「離島の少子・高齢・過疎化における通過儀礼の変貌―静岡県熱海市初島と山形県酒田市飛島の比較分析―」『比較文化研究』No. 82日本比較文化学会，2008. pp. 31-40.

尤銘煌「山形県酒田市飛島における通過儀礼の変遷―離島の過疎化・少子高齢化について」『山形大学紀要（人文科学）』第16巻第２号、2007. 2. pp. 53-63.

『愛知の離島』愛知県地域振興部地域政策課、2007. 3.

財団法人　日本離島センター『離島振興ハンドブック』国立印刷局、2004.

日本離島センター『日本の島ガイド』（財）2005.

全日本葬祭業協同組合連合会（調査委託）財団法人日本消費者協会『第８回「葬儀についてのアンケート調査」報告書』　財団法人日本消費者協会、2007. 12.

山内道雄『離島発　生き残るための10の戦略』生活人新書、2007.

（附記）本稿の一部は、平成18年度財団法人東海冠婚葬祭産業振興センターの助成研究調査（「東海地域における通過儀礼の特徴・変遷―離島の過疎化・少子高齢化を中心として」）による研究成果である。

The Transition and characteristic in Rites of Passage on Toukai Area
—The case of a depopulating and aging society on Islands

Yu, Ming-Hwang

Abstract:

The Toukai area which includes the Aichi, Mie, Sizuoka and Gifu prefectures is located between eastern culture and western culture in Japan. This means that the average culture and character of Japan can be found by examining the Toukai area. Especially, when you look at the interaction between the traditional rites of passage, depopulation and aging society. By the field trip investigation of ten isolated islands in Tokai area proves this.

As the result, we found that isolation, lack medical care, jobs and high educational institutes are the main reasons of serious depopulation and an aging society.

On the other hand, the depopulation and aging society has greatly influenced the rites of passage on the island. For example, many temples and shrines were forced to close due to the decline of believers and supporters. The traditional ceremony of the First-visit to shrine, the Seven-five-three year old ceremony, the funeral ceremony and so on have faded away because of the closing of the temples and shrines.